



朝夷巡嶋記

初輯

二



^ 13
3568
2



門 13
號 3568
卷 18

朝夷巡嶋記全傳卷之二

東都 曲亭主人編輯



初輯第三

遠山寺乃見樓
山脚村の教草

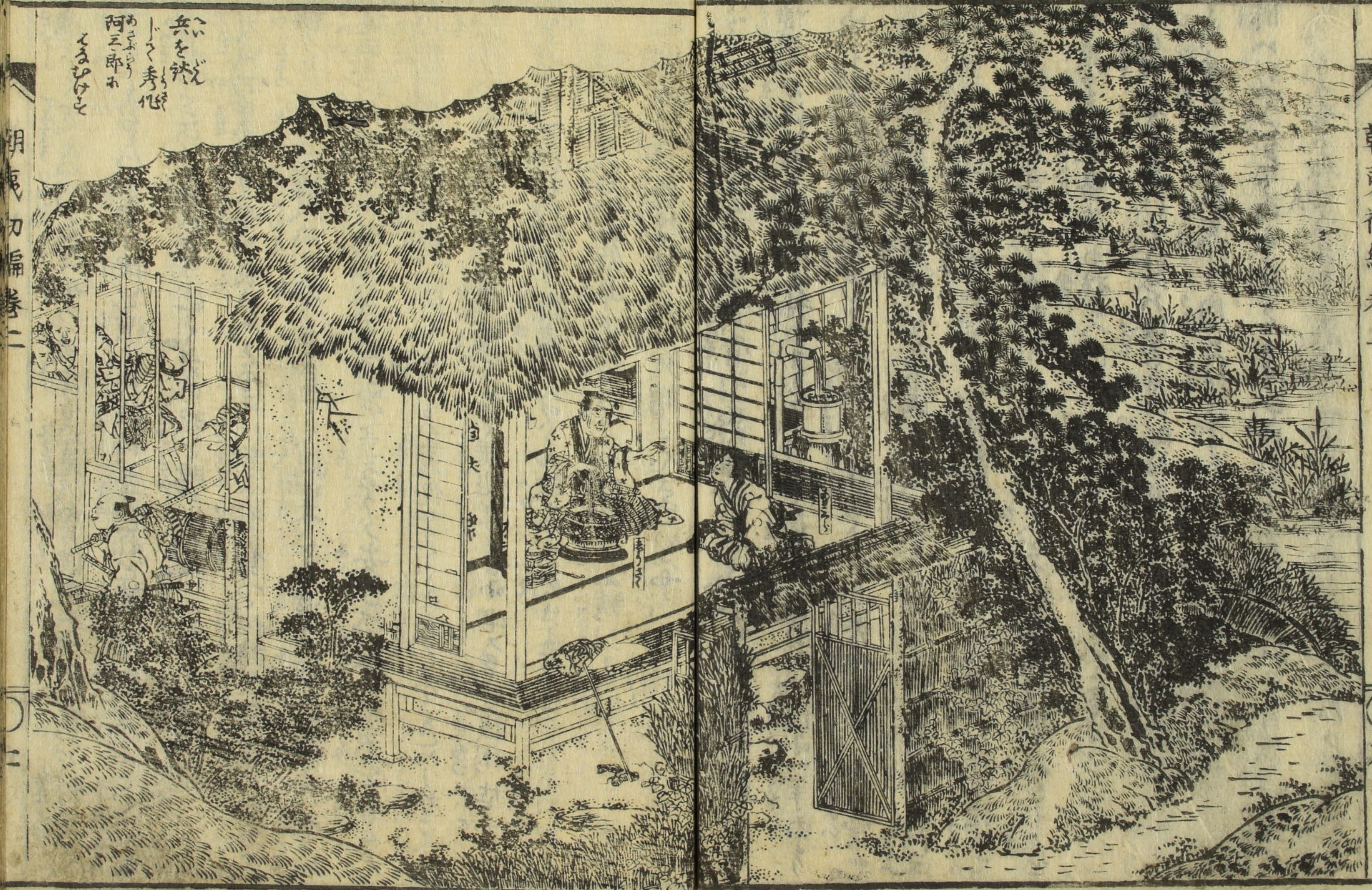
却説腰越獸六も夥兵ホとぬく。謙倉小以り東の阿三丸の爲体とへく
の條の音異怪談首より屋敷の主の義盛は告ぐる義盛はゆて故馬嘆し
とるやうて朝繪が靈魂稚兒は寅嫁を汝ホと逐せせある入寔は朝繪ハ
養ふまゝ恥を志る勇婦ととるやうの勸よその子の言病とるるよる
はも母のまうろ成安くせんとも渠は憤と起させてる。こが過失は今さふふ
かどうのあふぶごせとごその程疎拙く阿三丸を召以せんともさるる小怪阻
汝ホ追まら世ハのあふりふるる程。乳母が故郷ハ安房とるはゆ。こはかぞも

朝夷初編卷二

早稲田 大學 図書館
昭 34.6.3 燐
藏 書

あつらふ門三九を捉ふと難くもあつらふ事ごとく今より叔已なん
 理の通らぬ崇を受人と成ふ事あはば唐山晋の文公がめ子推をのり
 ぬらひける例もあつらふ事馳せる馬ゆ先づりともあつらふ事言の
 まふ事と流ともあつらふ事塊の衛るとつら門三九の恙るも成長せん致さず不
 善小他と不恙るも親のつら神こそ恙るも且く棄て再会の時と致すと
 中々ふ必ひえしく歎六ホといつら谷と退せがふも蓋て入ぬ苦も老のび
 まのびと僧と招れて鞠後かゝる経致福せ追福地業のいとする事他度
 かのうりけりまは宿は葉の門三九小俱しく恙るも船のその日の下晡小安
 房の白子小若くは夜とてまは舊里する大瀨の郷はあつらふ事家ちり
 まるくまは木まらうの門の松島小種せし破色小杜風ゆふ虫の声は外小
 妻の宿小徒織の結は蟬鳴唯よつらと刺せと鳴く良会けりも馬追致

あつらふ事まは葉は残は致遣の夕けり紙窓より漏る燈火の螢はうり小
 え西やれどは馴し俣の尻折戸推用と進み入るまは喃とてあはむも門やとくと
 うち敲はどひげけるたつら音吉の方女房は葉のあはむも同
 つ廻て豊六の紙帳の内より這かゝる遠く指燭の戸を引開て迎へて祝
 りまは恙るも帰御祝し祝するその樂もは歎とつらあつらふ事豊六の女
 房がおもくまつる稚児のこゝろはあはむも餉の著とてせつらまはぶその故
 るも葉の朝後か言金沢野の奇異怪談もちのあはむ物とつら
 辛く追捕と馳せまはる輝の起と告る豊六のあつらうち撃たるもつらこの
 とまはつらあはむも主君のまはるも命めて天離る鄙の田舎小海は
 長則母沖前の送命といふものつら又その縁は連る過世の瓜報もつら
 の秋緯脱れまはる樹のまはるも且吉凶と按するも母公の仰は恃るとも大乃禱の



兵を然
トク秀化
阿三郎
てまむけと

明鏡初編卷二

草津初編卷二

速よく去去ぬ阿三郎の母のり。ゆゆの果は宵渡さそがまき苞を引提す。
 方丈へもやん。父が口状と演へ。住持も又これと禁め。病む母もとて一囊
 の葛のこのり。あどとどし。才の暇と賜へ。阿三郎も遠く。礼乃よま
 多武推果。後夏冬の夜。いとふ一畝。脊負つ。住持も年来の教育を
 謝し。師兄道人。ホ小辞し。親里へ。還る。武藝乃師。靴
 健田が。門外。ふん。こ。さ。ん。の。さ。ま。が。あ。り。て。立。る。が。う。安。子。或。同。母。の。病。著。と。看。と。ん
 る。俄。頃。小。親。里。大。階。へ。の。り。は。と。告。へ。秀。化。中。々。出。迎。せ。る。さ。り。し。た。と。い。ひ。
 公。せ。じ。の。さ。ま。と。ト。と。び。里。へ。還。り。あ。り。畊。作。孝。養。小。暇。あ。り。て。技。術。藝。言。を
 ち。の。み。任。せ。ば。お。の。つ。う。疎。遠。さ。る。ん。軟。た。ら。る。さ。る。と。て。そ。あ。れ。狂。く
 少。選。禮。ひ。も。日。へ。る。飯。卓。と。理。な。く。も。窓。の。下。お。誘。引。く。對。坐。く。湯。と
 勸。め。葛。の。袴。の。棧。推。ひ。ん。形。風。端。く。さ。て。の。ち。や。う。と。忙。し。折。と。考。へ。り。く。

五心不足。成さむ。と。孝。子。と。苦。く。小。使。し。と。も。世。小。富。さ。る。あ。る。の。の。口。入。は。贈
 る。心。財。と。用。じ。道。あ。る。の。の。辭。成。り。て。と。こ。の。月。了。日。来。り。そ。の。骨。相。と
 現。て。ま。ぬ。和。敷。の。老。農。微。賤。の。り。子。の。いと。惜。ま。入。表。え。加。納。の。年。來。弟
 子。夥。あり。と。い。ふ。も。上。建。の。速。さ。る。和。敷。の。如。け。の。終。え。は。僅。一。年。あり。は。て。
 兵。書。武。術。の。奥。系。と。究。め。そ。の。器。そ。の。量。白。地。は。老。小。と。り。く。い。ふ。さ。れ。た。ゆ
 及。ぬ。所。あり。さ。れ。ば。も。是。や。く。傳。授。せ。の。の。只。一。人。小。款。さ。る。の。の。所。云。士。率。の
 武。藝。や。し。く。大。將。の。人。の。要。は。堅。き。武。推。き。挽。三。武。折。れ。く。一。陣。ふ。ま。む。
 の。と。武。士。率。の。勇。と。い。ふ。又。謀。と。帷。幕。ふ。め。く。勝。と。武。千。里。の。決。ま。と。武。大
 將。の。勇。と。い。ふ。和。敷。甚。三。勇。力。あり。い。ま。ご。用。る。所。あ。る。と。い。ふ。の。の。却。あ。り。さ。る。武
 こ。何。城。の。く。さ。る。と。い。ふ。和。敷。の。打。刀。究。く。強。く。打。ま。と。骨。碎。け。腦。中
 破。く。心。地。ぞ。さ。る。ら。う。た。比。の。小。熟。く。靴。よ。力。と。用。ひ。な。と。も。打。振。り。と。い。ふ。

孝と盡し友と交る小信をわじ分と守りて生活は懈らざる。これより先
回る。和敷壮年小至ふその勇才なるをこの本小の道に就けしむ
勉め今この実情をあるありとて言ひする道理は逼りて阿三郎の感
涙の坐小膝は落るはばばと且しく鼻うちぬきけり。ひひぬ月ころの
師恩今日の教誨生涯をなすはなすは病と家より病と起る母あり。父が
齡小動のいそちをさるるに人小賢察せざる如く。身よりうらむ親は
代ら生活不暖るを。おほ郡はありるを。師の安否と問ふべし。
こゝろおるるを。おほと家の艱をかこりて。おのがやめたるを。許
させ多といひあむ類は嗟嘆を。おほと秀作は。おほと。おほと。おほと。
僻る。おほと。おほと。おほと。おほと。おほと。おほと。おほと。おほと。
といふ教へ給くるたりの親の。おほと。おほと。おほと。おほと。おほと。

「おほと何と申すぬ。只よく勤む時運候名と揚家候起り。この外は
一塵もささるるは長劫時と程と。人の子と苦む。家母の
今よりと。おほと。おほと。おほと。おほと。おほと。おほと。おほと。おほと。
即ち感謝小坊。恭しく別我生。おほと。おほと。おほと。おほと。おほと。おほと。おほと。おほと。
跟々。折戸口を。おほと。おほと。おほと。おほと。おほと。おほと。おほと。おほと。
とて。おほと。おほと。おほと。おほと。おほと。おほと。おほと。おほと。

初輯第四

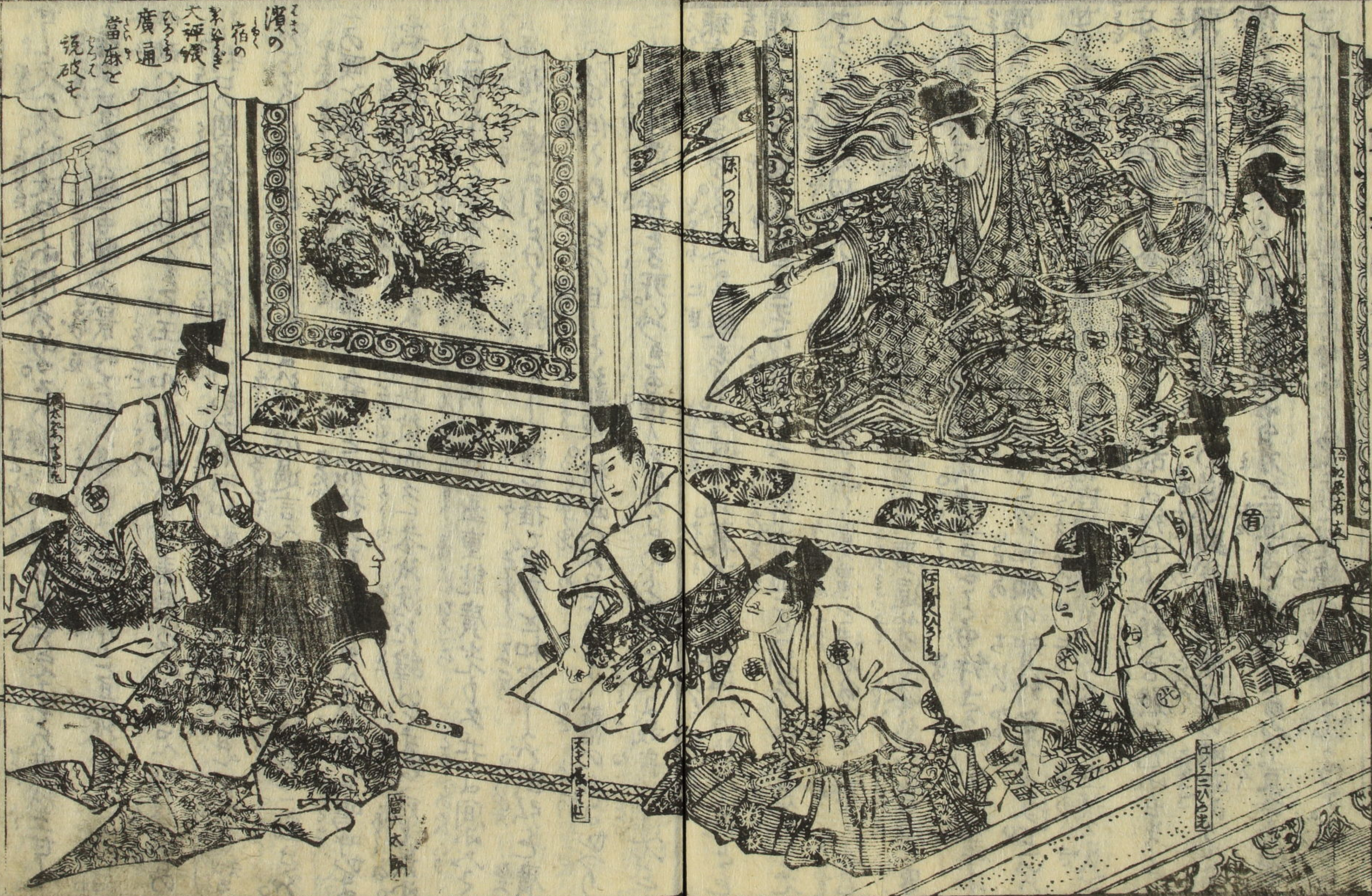
濱宿の館の蒲黄
修善寺乃走湯

さほ程小彌倉。和田小太郎義盛。数度の軍功ありて左衛門尉小補任
甘ん。建久元年十一月十日。兼侍所別當。さけり。別當職の兼任。己前。箇様は
京都にて奉仕せり。親族。昵志。他門。官家の

敏目子孫の榮達よふ邊くぞんえとけ盛盛彼つひ此あつけても門三九が
 るのさびやんた。とさうしとびつさよひりぞ岩間の昔清水源遠くこられ
 ても。獨々ぬの成後見は環あふ日のたろくまやとあふむうりみ果敢るくも夥乃
 主成送りけり。時ふ建久四年秋八月十日あまりののるるべ。鎌倉中騒動して
 人みる東西ふ奔走し。今合戦さうりぬと罵騒ぐと大さかろくを響の虚実の
 定うちの松と盛盛のまどもあまを。管中守護せんとも。大紋の下身申して
 烏帽子の初と結びあむ。そや縁親の立立まど馬僕がよろろく横さぬは率
 よの馬は閃りとうち跨つ。めいも続けと鞭波あげく。暮地は馳急のどんば
 佐木畠山八田下河辺千葉小山の餘眺近の鎌倉武士みる管中守護せん。
 人馬整とつと辺つべうものぞ。あれども管中の異はとひえ。る盛盛や
 心をあへく。むり角門よりさあへり。遠侍ふ桓候らん。日暮て衆皆退散せり。

斯俄頃ふ忽劇り縁故成存ま幕府頼の舎身頼朝臣隠謀の企止あり
 とく。伊豆の修禪寺へ推用られその家臣橋太左衛門木濱の宿の館小指籠王
 討心の軍兵と血戦く。討死とあまげん。さても参例範頼ゆへ左典義朝
 朝臣の六男之遠江州蒲の郷はせと多ひ。一は蒲原者といひり。源家再興の
 ちめり。東軍のまかせ加と幕府の罷用科。さても連枝の美とりつて
 平家追討の大將軍とけり。家身九郎判官義経ぬ。とも軍功あり。或は
 湖東の矢仲と討滅。更小屋嶋は平族成塵はサ。五年の苦戦は身命を擲。
 三軍小將とく。敢士奉は機を。進むとろ至とろ必や。使者とて幕府の
 旨と伺ひ。律むとろとく。決ませ。士來成得別礼儀を正し。老董成怒ひく。
 その異見と問さるとわの。人ともり。老實めて。慎むら。は。後者ありといへ
 とも市又三虎とろの。至下。西海の使者幕府を。範頼の書と。

濱の宿の
大評儀
廣通
當麻と
説破と



せし入りの時政の不行ある。その燈掛分明るる。その席を立せし。
 と膝突著せし。此も駿之景時とたゞ尋常の佞人維ふこと。
 破破の石るまとも。玉の如し。大奸の人の毒悪るれども。
 利口の國家成覆ひの聖人乃む。和服するが。
 武弘怒るれば。過言え。龍口廣通。
 その願と破るる。本事とせん。と服押の刀の鞘よ。
 之れと廣通の扇と取ら。向ひ此彼面を。
 のを禁めよ。と主命小橋太左衛門治部丞重能廣光。
 推測難く。遂に引ひ。辞ひ。理と推て。
 通也。低く。且くと。龍頼の彼人。
 今汝違が。強まる所。

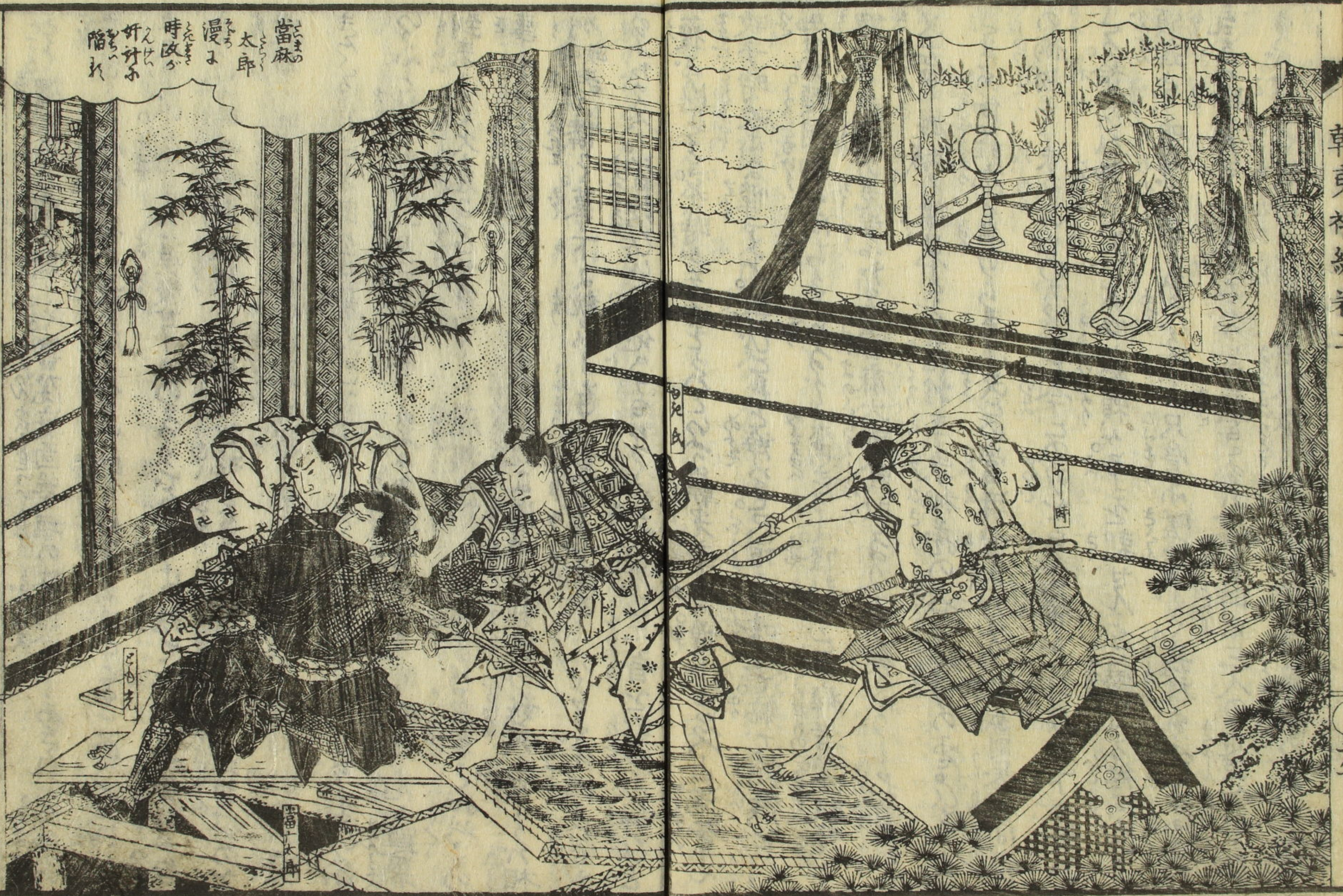
未定の理否と事。其た不忠。律みる主の。
 隨く。そのもの。
 の情我忘。て。執後。
 弘が。任。相列。政の。技助と。
 青と。正首。後堂。
 部丞。い。と。
 ふ。音。と。
 ち。り。物。政。
 主君。の。
 う。ち。

實に挑争の組伏るも易くさげきと頭立てるゆゑとを悉く揮ちり
 逃んとす。進退さゆく途殊失ひて桶の敷と身と同擡ハ幸氏亦り果りて
 朝光の力と戮し。幸氏被んとする程は長時ハ遠くまりぬり信と
 なく長刀と取のべく。當麻太郎ハ左の腋とぶらまんと辟けぬ忽地とらと
 潰る鮮血とも小武弘ハ懐刀と抜きて長刀の柄と切わら。嗚呼かやひ
 浅く。湯島小賣らさる。とらさる果は朝光ハ刃と取りんとす
 かつて右の腕と擡揚さるる下とやもハ元軀く左へ合さる。吃掻きり
 死にけり。瘠者自殺志とけり。朝光幸氏密に懐は正る。小四郎との吾們
 既より果さく。幸氏被んとせり。の代。惣ハ瘠と負。ハハ。命張乃。蔓を
 失ひ心と敷團ハ冷笑ハ嗚呼する。とらさる。和殿ホ力足。て。か。る
 大事の瘠者と。とら。途さんと。とら。けり。これ。も。浅瘡と。負。せ。ぬ。ハ。擡
 獲さる。と。と。長時がある。と。と。と。朝光幸氏ハ憎しと。多くと。先輩を
 政子時政ホ。憚。り。と。再び。と。と。と。只。ぞ。と。吐。れて。軀。て。死。骸。と。引
 せ。不。頼。朝。卿。由。間。ら。く。立。る。が。亦。南。さ。る。怪。む。と。の。瘠。者。ハ。主。後。豫。と
 認。る。絶。然。の。老。堂。お。わ。る。當。麻。太。郎。武。弘。の。身。帯。り。七。首。ハ。お。ん
 又。左。曲。ハ。既。儀。の。像。見。と。く。范。於。手。来。秘。藏。の。名。刀。燒。刃。の。ゆ。ほ。ひ。と。と。と
 一。色。ハ。伽。羅。丸。と。名。け。ら。ま。す。又。この。當。麻。ハ。カ。士。の。り。弓。前。器。械。間。狭
 の。術。固。より。未。熟。の。の。る。と。今。この。刃。と。身。帯。り。對。房。の。下。ハ。躲。ひ
 ころ。裕。と。し。ひ。恰。と。し。ひ。と。心。ハ。軀。頼。が。予。を。刺。せ。んと。潜。く。禪。回。は。と
 頭。懸。り。嗚。呼。危。き。ま。す。危。う。り。と。只。管。ハ。嗟。嘆。し。疾。視。ハ。眼。中。ハ。恠。ね
 氣。色。ハ。頭。り。ま。す。も。あ。む。ら。と。と。騷。ぎ。の。ハ。長。時。ホ。二。人。の。近。臣。と。勞。ひ
 多。バ。緯。も。遠。侍。ハ。せ。と。内。外。齊。一。騷。ぎ。と。ら。る。海。等。勢。の。あ。ん。款

當麻 太郎 漫子 時政 軒計 階

月夜田編卷二

草子



七三

九

予が推量は一点違つ後當麻太郎の昨夜より執持の芽ふあり。この好意は
 まるなり入君命と云ふは召はたの駕と候ぞ。ゆくと云ふは何の踏踏とあらん
 と。俱この准備とせよと只管いそびのめやわん。江舟人廣通と大夫屬重能の
 言の疎めび死をそんく。ゆる共の嘆息。梓治部丞と橋太左衛門の主の後方ふ
 追携り。あは疎人と掖とむは袂を弗と挿挿。風の柳の画障子を推用て後堂に
 入り多ふ又せんもてるるけり。當下四個の老臣ホハ席成かえ圍坐し。額と
 合。商議。廣通重能ハ主君小俱。宮中へ参りたる橋太左衛門治部丞
 かく所館小居籠り。夫人孺君と守護見とて内外の用意總て由おのせざり
 ける。からし。將は廣通の御座よりわめりけん。むより宿所小退た。その
 才三三廣光と招れた。蒲殿殿垣。管中へ参りたる主君の正直臣
 等が諫言をもちて告ぐ。さていふ。前車の覆るは然んく。警言をさる。後車

ついでに全うはされ判官殿の滅亡と俗の根原景時が証言せしとのみり。後
 人のいぬあふぶ。む。憎き。執持。枝と伐翼と。對外戚の威勢と。檀小
 せん。と。功臣の。い。く。さ。り。師連。枝。入。小。わ。の。如。く。寛。枉。と。ゆ。さ。せ。る。み。
 是非もろ世の形勢。幕下。天の。許。切。各。將。あ。れ。ど。も。こ。の。の。い。ぬ。と。後
 つ。せ。の。ぬ。ハ。千。慮。の。一。失。今。さ。り。ぬ。ち。難。く。ゆ。め。あ。ま。り。わ。る。痛。く。さ。る。五。君。見
 その性直ぐ。や。ま。る。人。の。好。智。と。測。り。ぞ。下。び。さ。の。出。ま。さ。る。ば。い。ん。せ。と。あ。ら
 目。あ。は。は。と。今。と。や。あ。ひ。決。め。る。君。辱。れ。の。死。と。死。と。固。より。臣。の。道
 これ。重。能。の。ろ。共。の。何。れ。や。も。あ。ん。俱。し。先。途。を。え。な。ら。ん。と。あ。ら。じ。り。囚
 見。と。か。り。め。り。心。討。し。と。向。れ。る。夫。人。孺。君。と。捕。ま。る。ん。橋。太。左。衛。門。治。部。丞
 武。略。勇。敢。世。も。あ。ら。ん。亦。忠。義。の。老。當。な。ら。ん。阿。容。こ。し。と。遠。子。ん。や。あ
 討。ひ。引。受。く。雲。時。の。防。だ。戦。か。の。霧。さ。り。く。衆。は。敵。の。に。主。後。有。一

命と價はさしむるも亦勞らく切はる。夫人膳太の前は第一の切臣なる。安
 達藤九郎盛長ぬの息女にてやうやむが村中の軍兵迫入るも情あつた
 きづらうと只なりとるた。彌君百地丸のふしに今茲九才よむらむせのひて。い
 ちんげん。生拘らんとしるが。ちん命危うなり。汝達夫婦この黄
 昏小彌君のちん俱しく。竊小下野へ走ると。足利たる。学校の學頭等長老を
 外伯父とてさへ解せせむ。便宜ならん。今アそおまのちん。小吾君逆心
 ちん。と幕下みづらう。時ふせむ。蒲殿の郎君へと世ふ。志らうとて
 その度へはせる。外口かかるとん。款。志らうとて。招るる。よく勉よと。悦示
 志らう。准信の山金五百兩。こ。彌君。たてまると。いひ。は。り。め。さ。う。あ。げ。廣
 光さうやう。こ。は。は。言。う。け。り。ひ。ぬ。志らう。あ。ま。と。家。兄。の。才。器。人。と。志らう。
 機小臨。志らう。志らう。謀。い。と。ま。ら。う。と。某。い。う。と。及。ぶ。た。願。ふ。家。兄。彌。君。の。後。見。と

志らう。ひ。後。某。の。大。敷。の。ちん。俱。小。ア。を。志らう。め。と。い。へ。廣。通。院。成。掉。り。志らう。期。小。な。び。て
 私。の。意。意。と。逆。ら。不。忠。た。り。程。安。村。旧。が。故。事。と。志らう。び。や。死。へ。易。く。と。生。へ
 難。い。寔。心。ゆ。く。も。と。志らう。忠。義。は。始。ま。る。れ。の。成。何。か。推。辞。と。あ。ら。ん。こ。し。を
 苟。も。老。臣。と。り。主。君。の。先。途。は。後。ん。汝。へ。又。家。嫡。は。あ。ら。ん。と。郎。君。の。お。ん。る。速。虎。口。を
 脱。き。よ。官。途。へ。兄。才。も。又。お。く。職。分。あり。兄。へ。才。小。讓。り。が。て。實。兄。小。代。り。に。は
 と。と。い。と。せ。る。廣。光。道。理。の。通。ら。ま。と。志らう。涙。さ。う。と。と。志らう。あ。め。の。か。く。て
 件。の。金。を。受。ね。る。箱。ア。そ。お。ま。守。中。絶。れ。お。さ。せ。め。ひ。ぬ。と。私。率。們。が。罵。れ。後。れ。は
 け。り。と。廣。通。の。處。へ。衣。裳。成。整。へ。馬。は。閃。り。と。う。ち。跨。り。後。へ。の。ど。も。十。餘。人
 列。成。奈。し。く。去。去。たり。志らう。今。生。の。別。送。う。と。目。送。る。才。の。為。む。ら。の。杖。の。日。な。ま。は
 短。く。と。入。相。の。袴。の。声。緒。行。を。常。と。告。り。庭。に。あ。け。死。と。と。め。り。虫。は
 ろ。う。と。く。哀。か。り。志らう。志らう。人。廣。通。の。去。去。年。の。夏。の。比。最。愛。の。妻。方。や。ら。り。て

自とまゝるひつさるうち膽り。あつぬぬといふのうまひも母への恙
 うのくちやうさふ丸も又何処へゆくべし。そ成るうくおねと走らば廣光が
 僻るひたつらん。ゆつても汝達各々のや。と年才あやせそ賢くも。結り多
 廣光へあつて小膝と丁と鼓声渡寛ふなりん。あつたあれとの禍を
 こごと未度は變ぢれば後悔其れよとらうごしを異めく帰館あつて祈る
 かひある幸へ廣光が庶勿の罪何とも御付らんよ。元期のうふいとす
 上まゝ残る井の坐は涙さうとく。今宵のう紙幡太の方又告うとえ
 とらひひたしうがさで各殊と惜ませぬん。おん歎けの程痛く。いん
 ぬらひあまひめめ成とよらるあ後成鬼ゆくと。正なる不形由忠
 義のる。と知られさふ。そのはを鞠とり。走らまけり。と歩あつて吾侪
 ひとり紙憎ても。憎倦びぞおぼさうめ。あつたせあつと堂と。とせく其

方と伏拜め。廣光声と激しく。よりあつた周薄いふひあつらんや。つらん君
 所へる海辺あり。夜ともふひさきと叱懲らん。白鳩丸とぬきび賺
 ありらん。楚と脊負ひて立あがれハ俄頃又歩ゆり岡の声矢叫の音
 戦馬の蹄ひふとる如く。置塵さう。廣光信とええり。地方も正しく
 濱の宿原末を討ひの軍兵推しを。とほり疑ひる。ゆきも敵由安
 穩る。じ果敢なく囚と多ひ。飲か兄るが。飛入と。先見誠一毫
 違つて形なれ世の。とまひ。月日ハ。我照さげや。と歎け共。は
 良井ゆ。おる。ほとろふ伸あがり。年未河産と夢りし。奥ういふなり
 多らん。かゝる時あせあつと彼溝の梁とも刃をたう。と。おあぬさくべし
 りの飛外よ。とめめ悲しと。唧々袖の雨る。と。猛火忽地天不衝。黒
 白もころぬ。野干玉の鳥夜と照う。と。と明く。煙又哽び。と。焦尻婦

駭く。伴の二人、破伏より、残る一人あり。さきさき、刀をもち振走りたるの、し
 や。と廣光へ左より彌君、揺揚く右より血刀閃く。西三合丁とさうちあひ
 くる大刀、風よ野伏が頸、或桐一葉地上に破と落ちる。骸の後、小倒を
 たり。危かりしと、浅良井ハ、懐紙とさうしひり。鮮血を拭へば、さうさう、刀を
 鞘ふ。さうさうも、奈を苦く、死せんと。あつた月夜より、雲の
 生きたる猛火の光り、小柏の鳥立さうさう、野寺遙く音にたの。鐘の
 ろろの響、道裙こけぬと、と、夕露の葉の名、小つぐ下毛野、足利投て、さう
 ゆく。時、小建久四の年、秋八月下旬なり。傳、三郎が十才のと、なま
 らく、渠へ満福の山寺より、鏡書ひ習せし比、かろべし。

朝夷巡島記全傳卷之二終

